

相 愛 大 学

研 究 論 集

第 1 卷

1 9 8 5

前 卷 目 次

第 31 卷

音楽学フィールド・ワーク調査報告 左右両部における「還城楽」	大谷 紀美子 小野 功龍	(1)
四つの弦の為の「幻想曲」	高橋 滋子	(15)
フランス プーランクと 彼のメロディー その1	ピエール 訳 稲垣 孝子	(27)
1983年のパイロイト音楽祭 —ニーベルンゲンの指環—	伊奈和子	(37)
イタリア留学研修報告	山田 健司	(45)
スイス・ジュネーブ海外研修を終えて	斎藤 達男	(59)
東西有漏知考	若林 正史	(71)
音楽学部学生の学園生活の意識と余暇活動について	長滝 野孝男 滝 省治	(79)
職業行動に関する研究 —志望職業にみる SDS 結果と選択要因の特徴—	森下 高治	(97)
異文化間理解と教育について —国際研究会からの提議と報告—	山村 慧	(109)
インテンシブ英語試論〔I〕 —日本人と外国語学習—	治田 耕吉	(115)

編集後記

師走をむかえた南港学舎は海からの風が冷く肌をうつ。研究室から眺める南港埠頭もコンテナを満載した外国の出船、入船で活気づいている。商都大阪の国際性を垣間見る思いである。わが大学論集も年内校了、新春刊行をめざして忙しい日程が続く。今回は先生方より13篇に及ぶ原稿が寄せられ、充実した研究論集となったことをまず以て感謝したい。

昭和59年度より、既存の音楽学部に加え、新たに人文学部が発足した。これに伴い研究論集も両学部を一本化し「相愛大学研究論集第一巻」として刊行することとなった。昭和29年9月発刊以来、前号に至るまで31巻を重ねた相愛の研究論集はここに音楽、思想、宗教、文学、歴史等多岐にわたる内容を包摂する論集として、新たな一歩を刻したのである。

また今号から執筆者のローマ字表記の方法をかえた。従来は西洋式に名を先に出し、姓をあとにしていたが、それを我々本来の順序(姓・名)とした。この場合、外国人に姓を明瞭ならしめるために姓を大文字で、名は頭の文字のみ大文字、他は小文字で表記することとした。これも、学術誌としての趨勢であると考えたからである。

学問の世界は、あらゆる方面において極めて急速に、またラディカルに種々の新しい知識や技術が形成され、その内容も膨大かつ、多岐にわたるようになってきた。専門領域の細分化も進んで、いわば国際化の時代を迎え、グローバルな視野からの学問のすすめが要求される現況にある。しかし、一方大学教育の現場では青年たちの言語表現の貧困と知的、形而上学的自己認識の欠如など、さまざまな問題が惹起せられて、いわば「大学のスクール化」が問題となっている。この研究の国際性と教育現場の貧困化との狭間にあって、両者の橋渡しの役割を課すものとして大学の研究論集のもつ意義は重大であると思う。今後の本学研究論集の充実と発展を期待したい。(前田)

論集編集委員

田	中	重太郎
西	川	恵美子
大	谷	紀美子
前	田	至成